雑説　―　現代語訳　―

【第一段】世の中に伯楽（馬の鑑定の名人）がいて、そうして初めて一日に千里を走る名馬が存在するのである。一日に千里を走る名馬は、常にいるけれども、（それを見分ける）伯楽は、いつもいるとは限らない。だから、もし名馬がいたとしても、（伯楽がいなければ、名馬としての本領を発揮できず）ひたすら身分の低い使用人の手で粗末に扱われ、かいばおけの間で（平凡な馬と）首を並べて死んで、千里の名馬とたたえられないで終わるのである。

【第二段】馬の中で千里を走るものは、一食にひょっとすると穀物一石を食べてしまうこともある。（ところが）馬を飼うものは、その馬の能力が一日に千里を走ることを知っていて飼うのではないのである。

【第三段】（そこで）この馬は、もし一日に千里を走る能力があったとしても、十分に食べられないので、その能力を発揮できず、天分の優れていることが外に現れない。そのうえ、普通の馬と同じ働きをしようとしても、その機会を求めることもできない。（これでは）どうしてその馬に一日に千里も走るという能力を求められようか、いや、求められるわけがない。

【第四段】馬を鞭打って使うのに、名馬を扱うのにふさわしいやり方を用いない。（また）馬を飼うのに、名馬としての才能を発揮させることができない。（馬が）飼い主に鳴いて訴えても飼い主の心中に伝えることができない。（飼い主は）鞭をしっかり握って名馬を見下ろして、「天下に名馬はいない。」と言う。

【第五段】ああ、そもそも本当に名馬がいないのだろうか、（それとも）そもそも本当は馬を理解していないのではないだろうか。